忠臣藏道化縁記

へ遠13
2420

神の代より陰陽和合の道と躰合時生と洒落。天竺ハ菩提薩埵菩薩と
略せ。浮屠氏の洒落。唐國の荘周を言ずと知るとて寓言者ハ有まさ嘯で
世ハ渡る。時代僕も手ハ江戸の生まれ友にそ有さまさんか馬鹿ハあらず
まて。頓智京傳柳亭馬琴。妙なる作ハ多けれど書て雪磨や三馬
が述さ作意ハまつくの酔。作ハ明さぬ夜半もなり。洒落がとりしさ
諧言ハ。斜ふする梅の木に彫つけ〳〵待うり版木ハ周るハ桜の
木でござりまん〳〵おとこを美知概久の物狂ひ。ぶらぶら。是も矢張木違ドや
と口ゝ西ゝら旅ど年々ハ。高くなるのハ鼻ぶかり。木の葉天狗の凡の先
まの半張ハひ川かくをのを

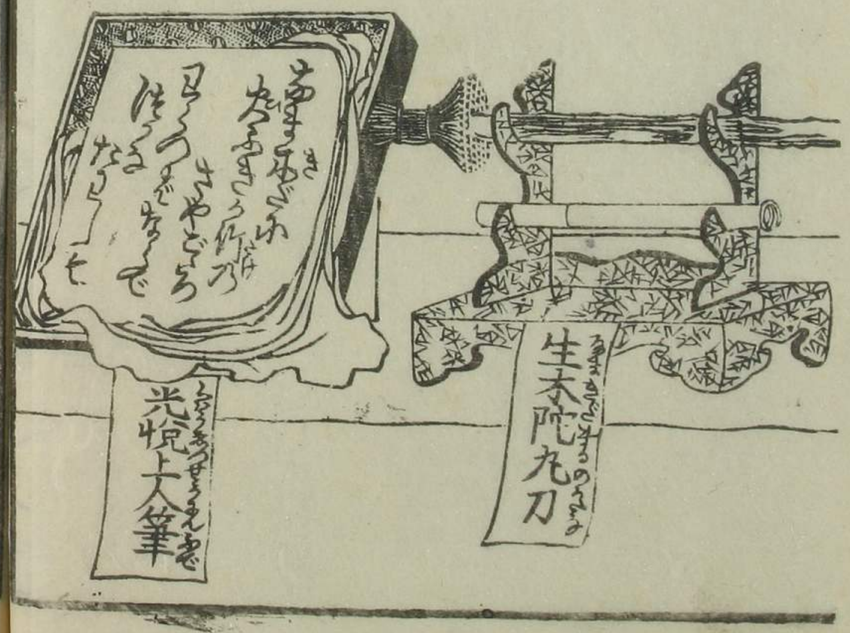
作者の高似ちく人の見ハ
ムらまきんとをを

林至の止藏坊

大正五年十月二日寄
室井平藏氏贈

へ逆3
明治文庫
2420

大星由良之助守本尊
両桂将棋のもん飛車飛将の
香車の袋一枚つき
飛車ひぞんとハヤ
大ゴリゆらのみ
武蔵のち武すこゞやくせろちん
王ほとつのて将棋さつ



里見義實の陣太鼓

そのむかし安房の国の住人
里見治部大夫義実の
侍女おまんといふ
ありしが ゆうさき人
をふていはく おまんごせ
いさ 油実よ ちやアろい小
油やの あんふれがたんく
すあろうてところんで 油まき升
とかりて大事なの太と 沈弟
ぞの 太とみんふなめて ちまろさ

つぎへ

つぎ
とりひけまで
義実大きふるう
あくて日
仕業をつれて
富山へ
金殿
よ
うまく
大川でゆ
大山でゆ
大材で
毛抜て
大田で
延
大槍で
曲亭の曲抱よ
世のびぎ
よ
奇妙なる
よろて

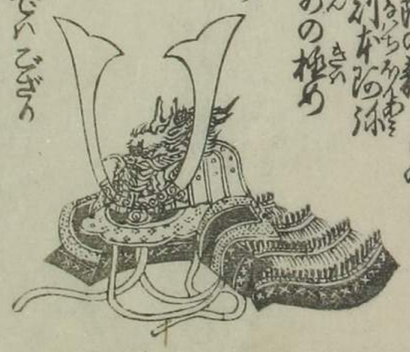
建長寺の
異寶
ありがたい
ふしぎ
俳諧人物集
しゃれ
あつかく
上下
をあつけ
ちゃく
こと
はいかいと
せんりゅう
あり
清和源氏の
西流
六孫王経基
十三代の後裔
左馬の頭義
朝臣の三男の
市公達
建久三年
将軍と
つぎへ

[illegible]せさせまゐらしうろ所正治元年正月十五日小[illegible]
五十三才の老ゝ源の頼朝その時[illegible]
[illegible]沖わ[illegible]せうとうわ[illegible]碁のうへの羽二重のふくさ
をとりけれバみるく因幡ふあむわうぐ仏ゝくといへ中にまへ人
の男がりゝ[illegible]五のあ方へあ[illegible]
朝さゑハかゝらが大きいとうけゑハりまゝ[illegible]
[illegible]さようちいさうぐりまゝとゆいけまゞ
[illegible]五の人わゝ[illegible]ぬ新ゞ見いこと
頼朝五十二才の古時のかゝゞなり

大序

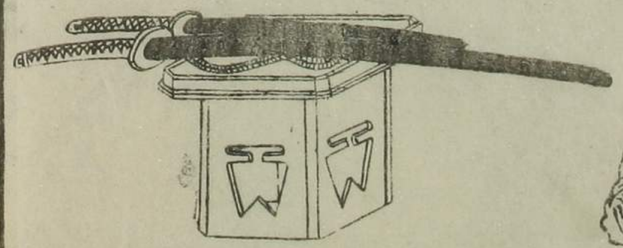
鶴岡將軍社參鹽谷
御臺塊見分師直惠羅惚
桃井口論鹽谷挨拶段切
第二段目力弥使者小浪
戀慕桃井立腹本藏松切
而加計出壽

仁田義貞の
めさまて新の乾ゞらの
[illegible]
かゝよ[illegible]の極り
書月わり
薫く
帯の
焼え番の
安祥番でいこぎり



蘭奏待の
名香ゝり
気をつけて
かゞゝまりませう

第三段目勅使饗應師直出仕途中賄賂種々金銀沢山伴内仰天師直追從本藏公何之角之饗應拜見同道桃井出仕師直段詫伴内御脅中何野加野追從其次塩谷出仕御臺狹夜衣返事師直肝癪前躰塩谷大名尓似合奴内義之返事自身持參少不念殊尓今日者勅使饗應三三日延多羅能多之蛇師直焼無茶井戸之鮒比利比利段段悪口塩谷



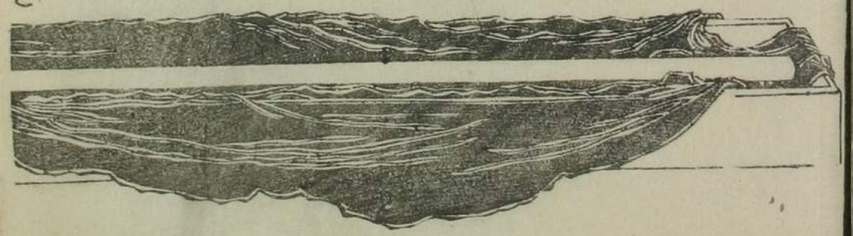
短氣短刀拔而切付而壽
加喰多是茂切付寸仁突
多方加能多蛇
第四段目石堂上使山名
悪口大星出仕遲加津多
御臺愁家中葬禮扱々而
氣之毒段切

鉄炮除の守ハ是より出ます

天の與の此金有難猪之撰物
猪ようさ犯一さんはとのかが動手いわ
ちあのとそ〻ぶんして猪ようち先へゆうまるあ
こまも鄭の室ゑ〻であらん

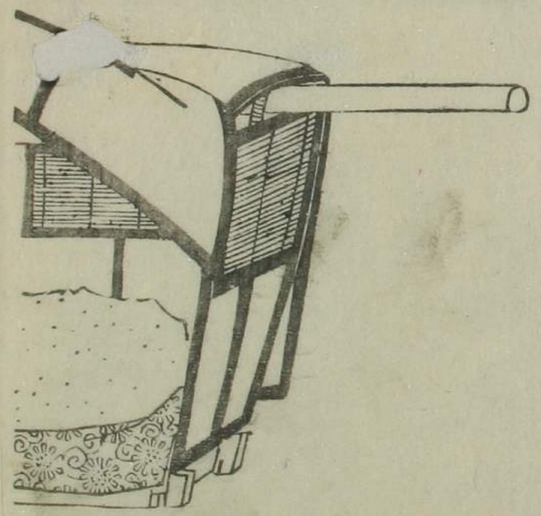
第五段目勘平鉄炮場定
九郎真黒死駄懐中五十
両勘平志目多人於殺而
金取而天之與登和味伊
事言於留勘平猪從先逝
第六段目親父死骸持桑
婆様立腰勘平財布見而

猪もいろくする
うちわ塩谷の
ものまいのあ
せねのごろんぞう
判官ハむ当よも
ちぐ〻ぜ大ぶら
ぐう郎巫九ち文
宮九ち弟い大ぶろ
ぐうちまんの
うちうう〻ぐうん
動手ぐ如ぐう
動手ちまく
とりてうけぐう
さぶ仮仕門二ろん
ぐうろうげんさもと



無返答切腹両士死體見
而怕少不念勘平本望血
判両士財布懐中五十両
第七段目力弥使者御臺
書狀大星内見鈎燈籠而
讀憎於輕茂二階加羅讀
憎九太夫茂様之下而讀

憎三人乍何賀書而有多
作者計知難多
第八段目道行旅路之嫁
入大名之行列見而曾奈
多之嫁入茂阿野様仁仕
度登和五百石之倍臣仁
和少虫賀與井



第九段目親子賀長之旅
無事而着於林賀取次娘
賀座仁着嫁入賀伊茶附
表之虚無僧賀胸悪力弥
賀鎗而突障子賀場多附

第十段目義平於疑捕人
仁略而荷物之長持捕多
捕多登近所江聞江而大
木奈仕合近所仁知多羅
敵討和出来間井
第十一段目夜討之銘々
揖矢而門打時打夜巡取

元暦元年かどのうちの石に人皇
九代宇多天皇の御子孫の五
松浦の殿よ大体の様子を表
ものあしが新羅国の軍に大勝
して唐土へ立つらるる妻の
さよ姫小コろ見送る所にのり
浦よりそ対さよ姫と
衣の帯をあげて袖をまひさく
あきかすみ所のしかれゆるる
水ぞさんらん〳〵はいまはたなぬ
一人ことのて石とるひとあるさのい
むーちり人くの去る所てまこと
それはひきかへてをんやの家陸

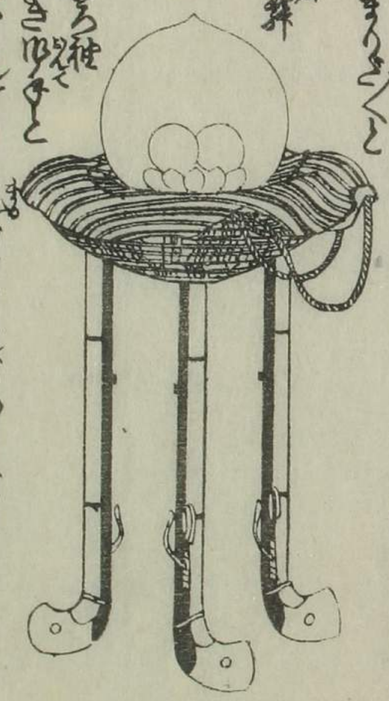
得而縄打歔賀隠而皆々
氣尾打矢間賀見附而塔
堂首打悦涙之波打皆々
手尾打登手加羅頓々果
大皷打一説赤穂忠臣經

これ
見ゞ本乃

南具佐弥陀南具佐弥陀

林　至止藏作

夜光乃三ッ玉



これ是ある第の内の稚者の名居
罪を人[illegible]をおりて[illegible]
守の屋をまえ疫病せ一月八十月
日八十に日の病ありしが大雪ゆえ
ちんくるる新へふいふちへ
るのあのきふしひい絵ばけ
こをゆえをまをそ抑こをく級味ん
ぎのをねうねぎえるとけぎを
するたえんのふえいかをを
ふるをえををゆくをうぶし
のの八月ゆもえよちくの器の
源代ち猛も何も野ちんだん
後の節ぎ小を御ゆえをよぎとのぎゆバ

[illegible]
[illegible]
[illegible]

美酒數杯を傾天のすゐかち仏仏ゐの教ときき長町長夜の長酒よ夜よ
をあつしていかりろ程ふうち雲りて宇頂天よ昇ゆひうくの酒屋
よ偽物擂のいひうけるく拂ら様よ麻釈迦とるーるよ
こゑさに怒りて撞よ戸の雲利屋の大臣酔ぐまの御をとけを
時の池へおこしこ元よりそこ出係るれがあんともあも
らんいけ元やろくまじくとあ川へるぐまに出て沈田伊丹の潮
と紙唐丸へいろり作ふまに報ふ湯をそっぎて呑酒屋白ち
寂の人詩百編の倉仏弦京屋へさづけて酒代の冥加減を
寂の人後宋の代よいうて東大寺の泥田坊ちめて日の
寂へ市連中し潮ふい三ぬ隠の作宇生仏表屋を求めひ
糸数へ酒の里に作の人法師の酒屋へあぐちの矢大臣を
つまくく中義よ寂しるふ酒の酒屋へ酒宴ぬ身いするいち是ゐう物の
よきぬて香ふ酔てあたいあぐまるいすまう

○酒宴如来の脇士ハ三世の仏ハ開運寺金蔵尼の守本尊分限
菩薩の尊像ゐう百物丹の彩吹よしして則五計上人の仏仏と
右の作手まハ土義教ケ新の縫をもちたりの作よまい地面操
式の帳面を拭ふ正念金二朱八片すて小判一両ハ換ふハ
銀一朱十六すて金一両にするハ貧窮すて高利の潮へ支
正ぐもこうも首のまりうね流生紙すくひたりのハが又しても
まうても紙て人を偽ふとハ苦る郷子を見下にたさびぐう
の者も出ぐさせびとの市せいぐうんを捕ぐんい出の
四仏を祈りて金ハの倉を郷ひ三百あの金を作るもひとを
偽ハのこうゐう金が歌の世の中の流生を酒宴しるひうちまち
福ものとせんとのみぐうを市せいぐうんちうまして沖縄猫のうう

○芸ゐるハ酒宴如来の脇士よ三世ゐるハ金剛力士八文字菩薩の

慶長十七年の頃庄司甚右ヱ門基にして北郭

中山寺伝四ヱ則ちの門の太夫の作わる松の大木を刻ミ出ス〳〵門客の初ハ弓削の

大食勘兵衛足公御作

義経の人ハ弓ハ
ねんぶつのこと

まゝ
くく

通

肩ハ初ハ
四ツ

つゞき　ちろりゆそまつ板の上にてさせりの小皿のまりこ
ぶ口ゆのつぼ手とのまちこりも文ねぶい俗の
通せ此なゆ和絵ぶのげてるゞもかをよく
ぶぜも酒もちんぐいも図

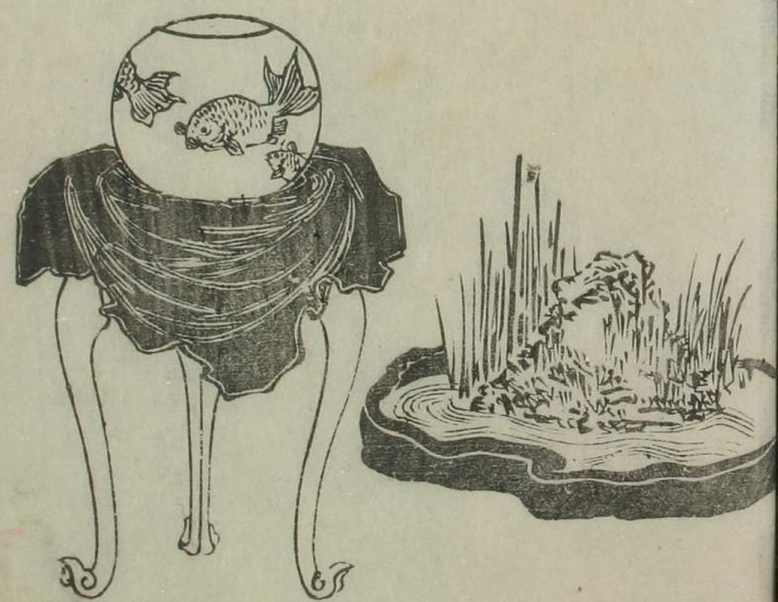
図のこぶぎんとの
時の公見るり大食の
見ぶ手多方ぶうて
みをいわぐる是ませう

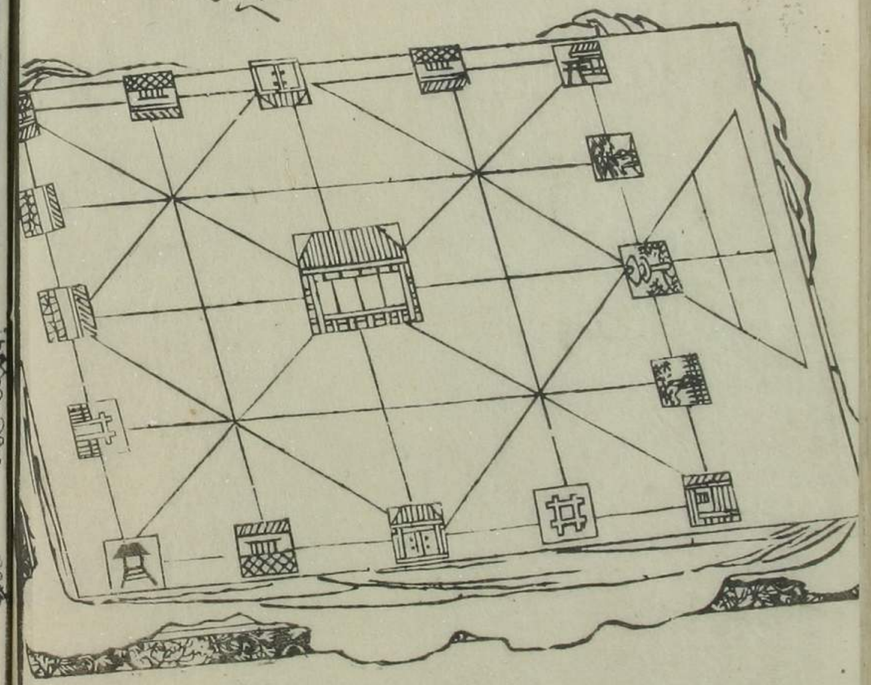
金魚不快之御王

正面ゆ教ひ事ろ人浦谷家の
重宝金魚不快の玉と申
事ある日ぐ天王だぐり三年
八月八業所の市縁日ゆく
の素のゆふ市玉ろり出ごろハ
せ日ぎまろくふぐうゆも
あゝねば不快の玉とヤ事る
あゝぐ者へようてらんちう

あげる是ませう

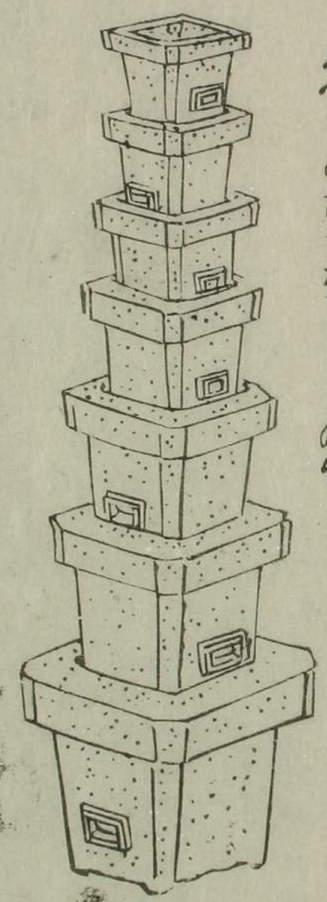
金魚だかりで
朝いろく





大盤若面經一巻

是なる石塔婆は平家の侍大将弥平兵衛宗清を欽源の義経公が怒りにんと仮る須磨の浦の古民石屋の摩を弥陀仏と名づけ其の七輪の塔なれ者なり物成 梶の中へすぐふ鞍盛りの迎福のあふ



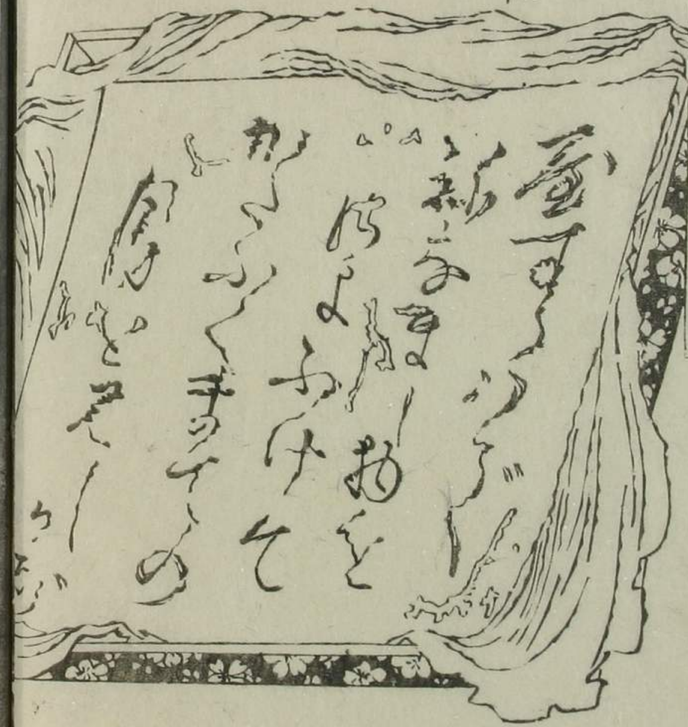
庭づあ
梯のはし
かくぐさ
ものを

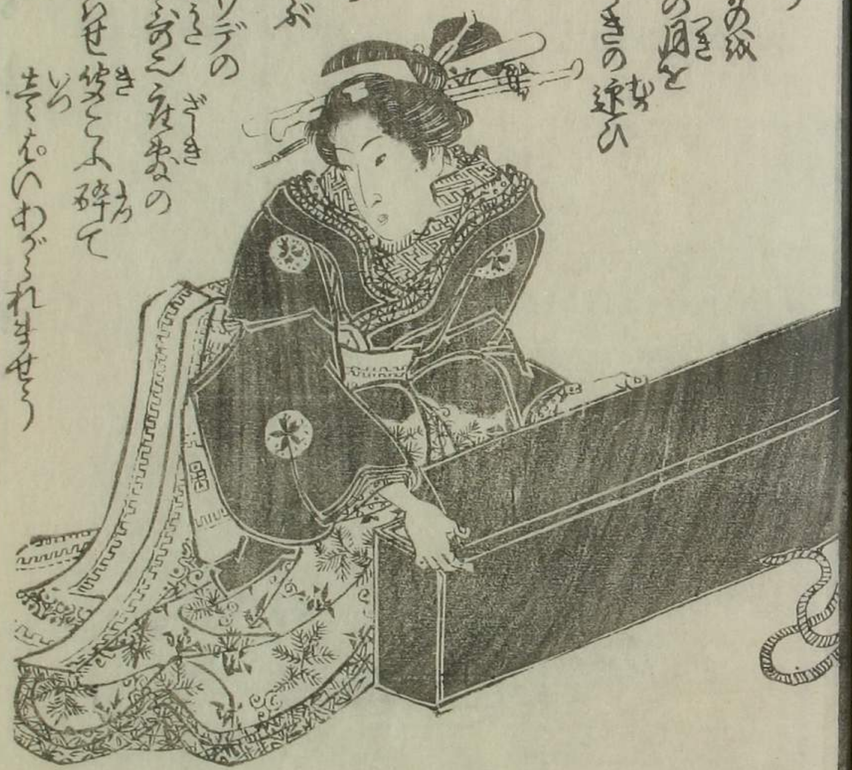
地ノの中風 宝すの 湯で 夢 棲すう
乞 輪 ふなくね 七 まんの 塔

止蔵法師

藝者衆之内歌の式紙

三味線の天智天皇
花扇堂蓮之の内ときき
唐来重子の命ぜられ
長綱太政大臣のおもせ
よてさい撥掉の
東深大来つゞ續し
此合巻、扨人元の
内の、方之源紀ハたり
春のゞうむく上人被濃
わまきまく元とゆるゝ





徳間わ〜ま〜ませう
「ゆきゝ〜ハで移ゆきまーものの紙
さまふけてかゝぶく生ての月を
月くるとの此ものい寝ーきの連ひ
ものきゝぶゆきゝふで
無晩ゝ寝ーの長
寝ーきかゝぶくまでの
月紙こるゝの此ん寝る
まゞめとハで寝ころぶ
ゆを挿めゆひサンヤリウデの
美を堅ふせゝとの此ゝ元ゝ元美の
きゝゝ一仲ゝてゆうゝ仕ゆそゝふ砕て
きゝゆいわゞれませう

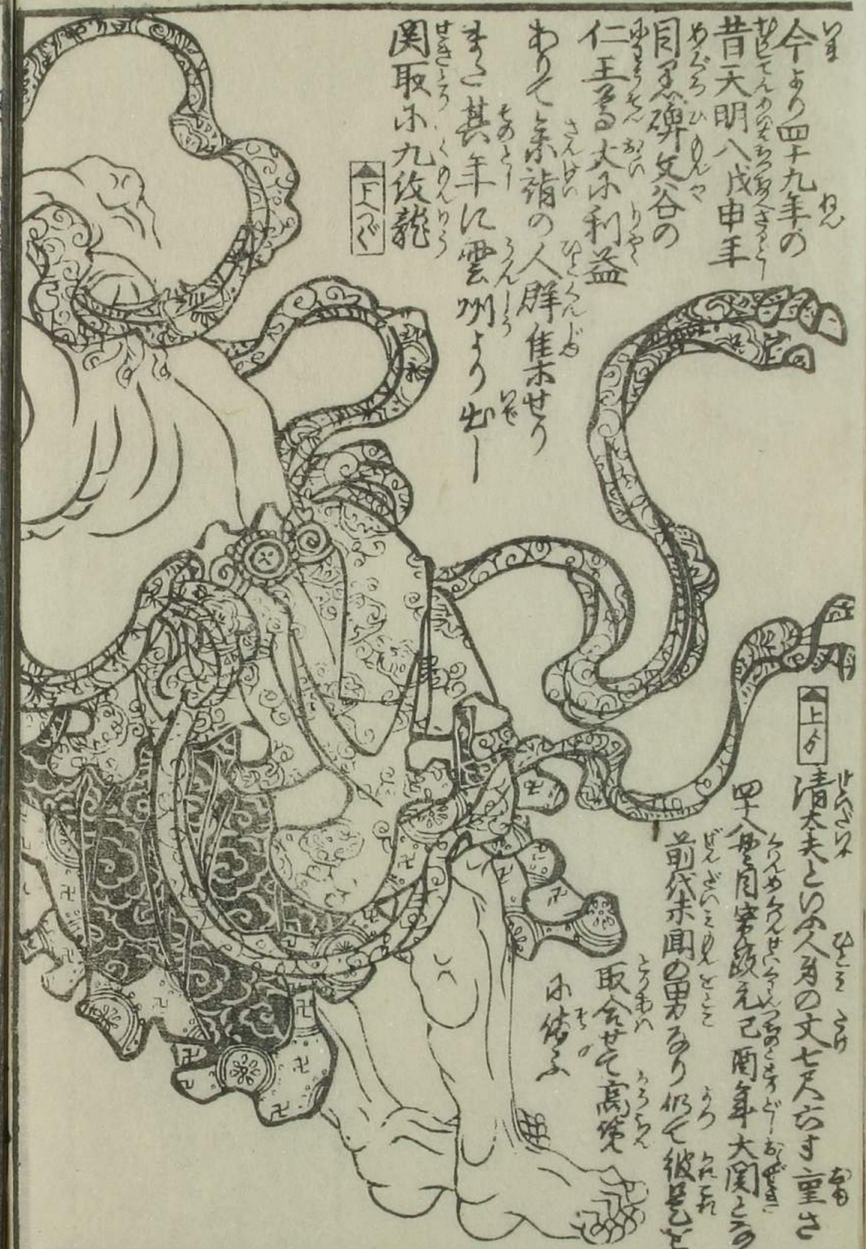
これ是に安寧一致の御世八人皇十一代 垂仁帝ハすいるきこ取くまを さうきを
あめさせ給いらんあり 四十八手の芸像まそ おりゝびんぼきゑがたけ ふさせかひのわ
〳〵の形魔をたらっそそらとでせいとらくらま きふまあり まひ波ち、ゆとを

浦人松風の和ひまと隅田川の狂女式まづめ女性ふ ゆひ系ゝと
ありの我妻にふゝひ 多ひ八条の ゆひ大深の芸居ちんせう 膝風と
哀のうをとりあり〳〵る 書風のいきゝゝて老れの祝義まぞかゝせん

この世のゑんちふふうて福寿のとげうれまをう

豊後の國 富本山豊前寺の本尊

今より四十九年の
昔天明八戌申年
同年碑文谷の
仁王尊大ふ利益
ありて宗旨の人群集せう
まこと其年に雲州より出し
関取ふ九伝龍



上つぐ

上分 清太夫とゝふ人身の丈七尺ゐす重さ
四十人番を用客級元己間年大関とゝる
前代未聞の男なり仍て彼是を
取合せて高覧
ふ供ふ

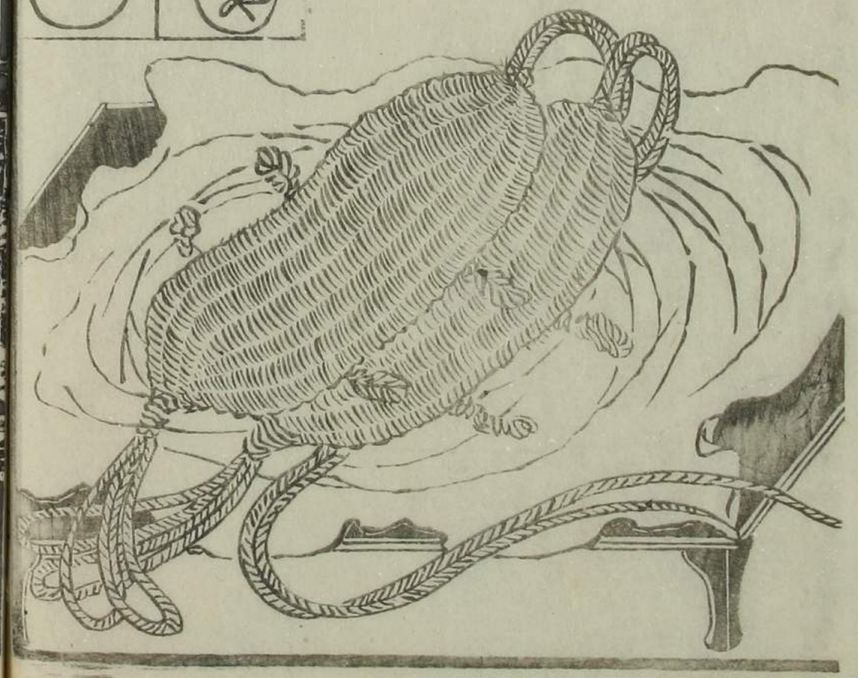
碑文谷仁王尊文畫略縁記

抑佛法守護の仁王尊といへども辱くも大佛浅の一文より二文と
別まと仁王と現ト三文の浜泥ふ住で四文谷の五文番とるくせの人
故ふ六文の光岸ちを灯し七文の沛俵を供ト八文紙加とぞり

八月廿五日より九文字がめく裸
みそ法つ三十文の巾長袋十文の鞋
四も徒ぢたちへさたとの巾廣云
仍て十二文の巾長を巾穂と云
賽錢小上て拜あり

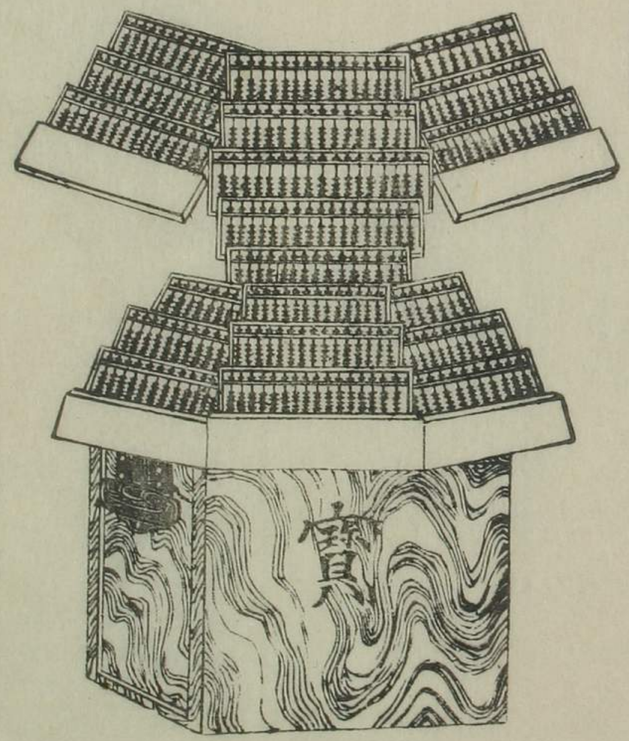
抹至止藏作

五雲亭貞秀画



算勘責之鎧

長さ巾穂八尺
年數拾弐万三千
四百八十六石七斗八升
九合五夕年の
閏年年中源の
義經云の中
龜井の六兵衛の
長刀ちくしゃ



其後 開立年ぐう 二一 天保の五升兵衛が 相傳して 八義乃
数ひと見一奇妙 他九小 責分こと 大数の中成 二ッよ 剃三ッ小
剃九ッ小まで 引ろて 通りまと 引ろ〳〵して 抽さて〳〵 早剃の手練よ
えくの数へ 引うりけり 五升 吾衛い 九流と九変 流をしが
一進と 又すくみ 我一子 帰一信七 弟へ 此ろひを 相傳して
九と 八十一業のとき 関知〳〵 往生をげ〳〵まとうる
業動 責馬麻精と 名付 〳〵 猛ゑり
七の内成 二ッ引うよろ〳〵 五信わ〳〵まとすせう

成田屋武道妙王

市川の家 万治二庚子年ゑ
相續して 今天保七丙申年まで
廿百七十七年小成

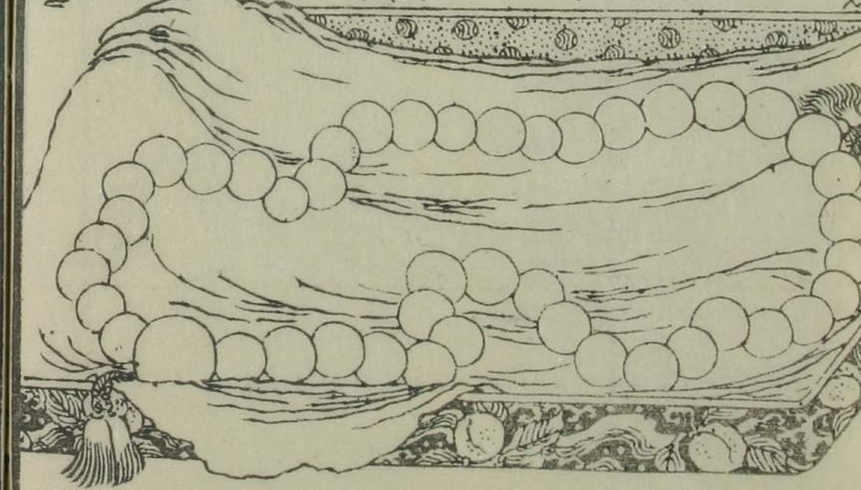
是不安至一切衆生も成田山不動明王と一体分身
なれば成田屋武道如来と申奉まつる則此頭巾を
頂き右の市子なれば市川代々の大太刀をもつて
なれば猿猫ぬを初の法こと先祖万治二庚子の年 元祖
市川團十郎上人鯉の昇龍門の滝へ登り眼ともるく
甚妙なる美中に不動の慈悲を蝙蝠蛞蝓の口元細くとも
未廣がり孫子孫をさかり繁牡丹花の義貴ゆしを世の
世話なりへ〇ねも人伊勢湾花のぼる数多へ腰ぐるる
まで長命長寿子孫連綿と相続なるへしなれば鼻の

ひくき者は高くなるへ眼の大なるも一ツゆらめ
大きくなるしにのまるるぬも小田原外郎の奇特なる機
おぼゆなるしを名出ひどり出し柔弱なる人も
一ツゆらめば暫くのうちに美事の仕事物となる助六
げんくく頭を高めるる所痛やまも薬屋なる
もち奏なんとの由撰頭巾きの
此方は美味八代目 成田十郎ぐんぐりと

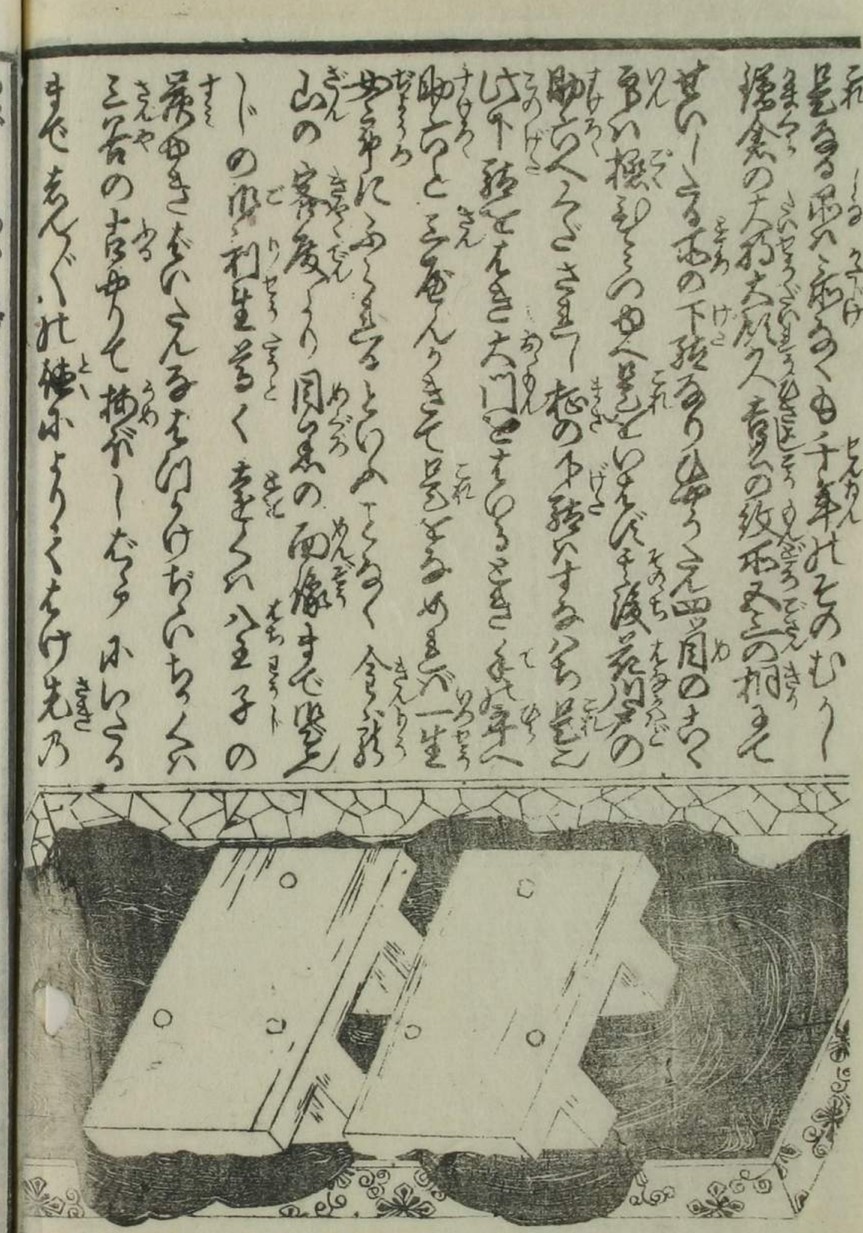
へさそんなるこしに手合い上位ときいて酒のるざとありしのうこれもものつも
いろ是さそも鬼ちくの相かるけんその相伴ひ雲も別るり大江山
鬼の居接く新出屋童子いい宮り四ッ切と岩屋の門ひうけわんど
そもく上位いきのきろねたいこうあいせひあっしれ肩で屋きろそり
うこより南枝の梅ぐ番や義の真弓せ東風が梅町ろふきこ屋町
五年ぶりぞの屋うをしいこびと江戸ッ子三田産紋ホあろうす渡
丑のっ縄もわへ小二郎ごろつきであひふ日さりふきこ童子出
屋の屋ぐーらモレ鬼ぐ鬼さんおんゆもうちこのんゃゆん

作者曰
此文句ハ北二年むーのせりゆゆそ宣あて吉好の
ゆ方ハ四ぐんードるーんが再こふ字を

日本一

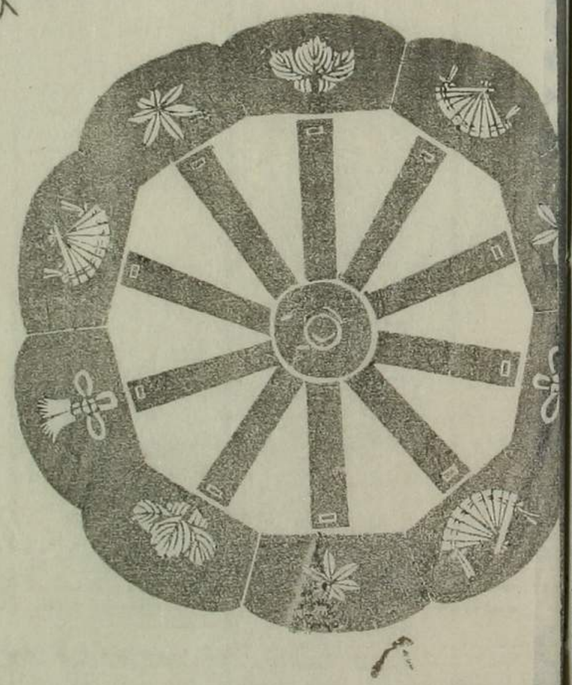


間より安屠上絽を一めま
えるやどの眼力はよくるきんの
ゆせいてんるり
久さ五ようり
ぐ〜ぐ〜
ゆ絽るれば
ゆ絽るのる
ありとふ河原どうう
又ぎゆの月の傘をます
べ〜とのゆてせんゆもんきの
ゆ方へ市川八代ゆ絽へよろく
見物のゆれすもう



これ見るの事の端えへ
あのむかし北郭うえ
大よそ山よせの曲
俗の名とうへ千山美
妻と義理と雑そで
ふくしの初業小むらさき
其外美人の枕とあつめ
客の夜毎ふるくと
早一枕のはるや又うら久深
ひらくの美紀車の走りとうきれうり
まつを下より返してよめば見えて居
とあらた宝の俳字入るれば
車も枕ものぐるあ中ちうう

よりて浦がつきまん
きく巴沖めまと
まとう



○是は拙作の一軸へ
先の武家三馬が戯作しう
江の小男のたろむらのひとと家のあり
する時だろむら芸屋幸しそ探び
屋くろしがぐでの大屋あさ元のとんだく 楊枝
源氏も手元のものく天神縁の列屋 もと子の字
八つと書くことをたのくよんざものの 紙子ごとありけるべ
ト郭のたて むらその年日づう八丈ゆん見ちくせもへそのくふ

子子子

立路喧嘩よ石と焼と
かろもくと打合ふ時ひろくと
ひろの光り電光のごとくなり
今稲妻のひかりハ不破の
関たちまち山と高が名字の
名古屋の大打撃の焼下
よりもこれもこれぞ
倫回の車の輪と
黒手玉ろ再生
不破
と名古屋の軍
勢ハ三日天市川
八代目 向島白猿和尚の

狂言ふも
〈三階ハ〉ふとりとふ
はまりて流行の
早替りして
とりなされ
ちろり
ようれ
ふれれ
はるの菜仙女香
坂本民製

林至止藏作

五雲亭貞秀画

牛メ八
三八七三